



第一期実行委員長
井田清さん

鳩山町震災ボランティア実行委員会第一期実行委員長の井田さんは「ひどい震災が起こり、何かしなければいけない」と思っており、JAXAと日立の空いている社宅に避難者を受け入れたらどうかと町長にメールを送りました。すると、避難者を受け入れるためにボランティアを募集するとい

う連絡がすぐに返ってきました。ボランティアを募集すると、ふれあいセンターに500人もの希望者が集まったことにも驚き、鳩山町の人はとても温かいなと思いました」と話してくれました。

第二期委員長の大久保さんも「ボランティア説明会に訪れる人がたくさんいて、皆にとってもエネルギーがあり、熱量がすごかった」と話しています。

その後、鳩山町震災ボランティア実行委員会が設置され、井田さんや大久保さんも委員として参加しました。実行委員会での活動について井田さんは実行委員会

でどのような活動を行っていくかということになり、まず避難者の生活の基盤を作っていくこと、そして非常に大きな打撃を受けているので、精神的な支援をしていくということとをあげ、4つの分科会を作りました」と当時の状況を話してくれました。

委員会では様々な活動を行いました。井田さんは「平成23年10月29日に行った「かきまっ書！ふるさとへの想い」の時に、大東文化大学の学生がたくさん参加してくれ、1年延長しても宅の借り受けを、1年延長してもらうために当時の新成人を含め、たくさん若い人が署名してく

れたことが特に印象に残っていると話しています。

これからの鳩山町について、大久保さんは「鳩山町のような小さな町で、これだけの避難者を受け入れたのは評価されるべきこと」と話したうえで、「私が実行委員に入った理由の一つは、こうしたボランティア活動を通して、地域社会に参加できればいいと思っ



第二期実行委員長
大久保邦子さん

たから、町はボランティアを活用することで、よりよい地域社会をつくることのできるのではないかと考えます」と話していました。

井田さんは「若い鳩山町は若い人が減っていて、今、鳩山町は若い人を発信したいと思うような、魅力を発信しなければなりません。鳩山町は、これらの活動を行ってきた人が住んでいる温かい町で、また環境も優しい町。先日も大きな地震がありました。これからは、どんな災害が起こるか分かりませんが、そんな時、優しさのあふれるこの町はまた大きな力を発揮することだと思います」と話していました。



①②平成23年3月27日に行われたボランティア説明会会場と登録時の様子 ③仮設住居の清掃作業 ④町民から寄付された支援物資の数々 ⑤平成23年10月29日に行われた「かきまっ書！ふるさとへの想い」 ⑥平成23年7月3日に行われた「歓迎茶話会」 ⑦⑧平成23年8月9日の「チームはとやま被災地応援ボランティアバス」 ⑨平成23年11月27日の「いも煮会」 ⑩平成24年1月～3月末まで行われた「思い出復元隊(はとやま)写真修復プロジェクト」

東日本大震災発生から10年 町の皆さんで取り組んだ 支援の輪をふりかえる



町内の仮設住居入居者を対象にしたアンケート調査結果をもとに、実行委員会ではどのような支援ができるか検討しました。その結果、生活支援などのほか「仮設住居入居者と町民との交流」や「町の魅力を知ってもらうための事業」などに取り組みすることとし、「歓迎茶話会」「ふらっとバスツアー」「かきまっ書！ふるさとへの想い」「思い出復元隊(はとやま)写真修復プロジェクト」など数々のイベントや事業に取り組みしました。

また、8月9日には17歳から75歳までの応募者33人を含む43人が参加して、宮城県七ヶ浜町で「チームはとやま被災地応援ボランティアバス」を行いました。

このように東日本大震災の発生から町内で多くの方が支援の輪に参加し、避難者、支援者の垣根を越えて、温かい交流が行われました。

今回は、支援に携わったボランティアの方やゆかりのある方に、鳩山町での当時の支援状況や、震災から10年経過後の思いをお伺いしました。

和3年3月で、平成23年3月11日に発生した東日本大震災から10年となります。

町では㈱日立製作所及び宇宙航空研究開発機構(JAXA)のご厚意により、仮設住居を借り受け、平成23年3月27日に説明会を行いました。会場には定員を大幅に上回る、約500人の方が駆けつけました。このため町では急ぎ、午後1時から2回目の説明会を開催し、説明会終了時のボランティア登録は、約400人の登録がありました。

3月28日にはボランティアの方々などにより、仮設住居の清掃作業が行われ、3月30日から避難者の入居が始まりました。

その後も町民の皆さんから物資や募金などのご協力をいただき、5月20日に、町民の皆さんと町が協働で鳩山に避難された方を支援する「鳩山町震災支援ボランティア実行委員会」を設置しました。

令和3年3月で、平成23年3月11日に発生した東日本大震災から10年となります。

町では㈱日立製作所及び宇宙航空研究開発機構(JAXA)のご厚意により、仮設住居を借り受け、平成23年3月27日に説明会を行いました。会場には定員を大幅に上回る、約500人の方が駆けつけました。このため町では急ぎ、午後1時から2回目の説明会を開催し、説明会終了時のボランティア登録は、約400人の登録がありました。

3月28日にはボランティアの方々などにより、仮設住居の清掃作業が行われ、3月30日から避難者の入居が始まりました。

その後も町民の皆さんから物資や募金などのご協力をいただき、5月20日に、町民の皆さんと町が協働で鳩山に避難された方を支援する「鳩山町震災支援ボランティア実行委員会」を設置しました。

鳩の集い(傾聴ボランティア)



代表 古平 堯 さん

10年間活動を続けられてきたことについて、代表の古平さんは「私たちは悩みごとを聞いたときに、こうした方が良いというアドバイスは基本的にありません。傾聴というのは本人自身の気づきの時間や場を提供するものだと思うので、そのスタンスを徹底することで、肩ひじ張らずに続けて来られたのではないかと話していました。

元々、鳩山町震災支援ボランティア実行委員会分科会の傾聴ボランティアとして始まった「鳩の集い」は、平成25年4月から実行委員会を離れ「鳩の集い」単独でボランティア活動を行っています。開催回数は213回を越え、延べ2000人が参加しました。現在は、第2木曜日と第4土曜日にふれあいセンターで月2回の傾聴の会を行っています(2月17日現在、新型コロナウイルスの影響から休会しています)。

10年続けてきたことで集いの形は変化してきました。支援者と避難者という垣根がなくなり、「近所に住んでいるお隣さんみたいな関係になっていく」と古平さんは今の鳩の集いについて話します。「避難者の方々の、厳しい境遇に立ち向かう強い気持ちへの尊敬の念が活動の続けさせています。またこの活動により、災害を忘れないことに繋がりました。現在、避難されてきた世帯は町内に6世帯、近隣市町村に4世帯いますが、その方たちがもうやらなくていいと言ったり、誰も来なくなったりするまでは続けていこうと思ってくれます。古平さんは話してくれました。新型コロナウイルスの影響で休会した会の会が早く再開できることを願わずにはいませんでした。



▲「鳩の集い」の会員の皆さん。会の再開を楽しみにしているとのこと。

10年続けてきたことで集いの形は変化してきました。支援者と避難者という垣根がなくなり、「近所に住んでいるお隣さんみたいな関係になっていく」と古平さんは今の鳩の集いについて話します。「避難者の方々の、厳しい境遇に立ち向かう強い気持ちへの尊敬の念が活動の続けさせています。またこの活動により、災害を忘れないことに繋がりました。現在、避難されてきた世帯は町内に6世帯、近隣市町村に4世帯いますが、その方たちがもうやらなくていいと言ったり、誰も来なくなったりするまでは続けていこうと思ってくれます。古平さんは話してくれました。新型コロナウイルスの影響で休会した会の会が早く再開できることを願わずにはいませんでした。

鳩山町東日本大震災避難者の会

町内仮設住宅に避難された方などで組織された「鳩山町東日本大震災避難者の会」の元会長、鈴木 文子さんより、メッセージをいただきました。



元会長 鈴木 文子 さん

東日本大震災から10年となります。突然の大地震と福島第一原発の放射能汚染による避難指示。23日で戻れるはずもない避難生活の始まりでした。突然の避難状況に着の身着のまま、各地を転々と避難移動し、やっと手足を伸ばして休める場所としてたどり着いたのが鳩山町でした。鳩山町では一時期、福島県と宮城県から約140名の避難者がお世話になりました。

当初から町民の方々や多くの支援団体の方々、物心両面でのご支援をいただき、生活を立て直す時間を与えていただきました。深く感謝しています。

ボランティアの方々からの励みや援助により、鳩山町東日本大震災避難者の会を立ち上げ、「自分たちの力でできることは、自分たちの手で」を実現で



▲平成26年3月8日に贈られた福島県産のしだれ桜(倉真の桜は農村公園内のもの)

「この感謝の気持ちを何かの形にして残したい」と皆の気持ちが一つになり、福島の有名な滝桜の苗木を残すことにしました。お世話になった皆さまへの感謝の気持ちを決して忘れることがないように「感謝の木 福島島のしだれ桜」と命名しました。春には見事に薄桃色の花を咲かせていると聞いています。東日本大震災から10年となりますが、鳩山町でお世話になった多くの避難者も今はそれぞれに生活を立て直して前に進んでいます。桜の花を見るたびにお世話になった鳩山町を思い出し、心のふるさととして、いつまでも大切に思い続けていきたいと思

東日本大震災 10年復興祈念展を開催します

町では震災から10年となる令和3年3月に、避難者の方と鳩山町との関わりを振り返るとともに、犠牲となられた全ての方々に対し、哀悼の意を表するための復興祈念展を開催します。ぜひお越しください。

■展示期間 3月8日(月)～19日(金)
※当初3月5日(金)～15日(月)の展示期間で広報していましたが、緊急事態宣言延長を受け

- て期間の変更を行いました。
- 展示場所 鳩山町役場本庁舎1階ロビー(予定)
- 展示物 応募いただいた東日本大震災に関する写真、寄稿文、絵など、鳩山町の東日本大震災における関わりについての説明パネルなどを展示します。
- 問合せ 役場長寿福祉課 ☎296-1241

東日本大震災の被災者を支援する会

出

生地は宮城県の南三陸町、高校時代は福島県いわき市で過ごした鈴木さんは「自分の出身や育ちの場を含めた東北一帯が大変なことになるってなりました。被災地に行って支援することもできないので、鳩山町で何らかの形で支援しよう」と周囲に呼びかけた。平成23年3月26日にこの会を作り、またと話してくれました。



▲会で始めた「写真洗浄プロジェクト」は東京電機大学鳩山キャンパス、鳩山震災支援ボランティアとの三者共催。思い出復元隊(はとやま)写真修復プロジェクトに発展しました。

活動の中で印象に残っていることを尋ねると、「今宿の仮設住居に入居者が入ったときに、会へ何が必要か聞いて回ったときのこと」をまず話してくれました。「とにかく、情報がないというお声が上がったので、朝日新聞の販売所に交渉に行き、避難者の方たちに情報が不足しているので、一肌脱いでくださらないかという話をしたら、快く引き受けてくれました。最初は1か月という話だったけど、最終的には1年近く無料でも配布してくれました。町でも努力してテレビを設置して



元代表 鈴木 伸 さん

くれて、皆にテレビや新聞や冷蔵庫などがそろったところ、ようやく避難者の方たちが一息ついたという感じがしました」と情報の大切さを特に話していました。鈴木さんは「震災から10年も経つと復興は進んでいると一見感じられるかもしれませんが、人の気持ちを含めた復興はまだまだという感じがします」と現在の状況にも触れていました。「地震があった大きな黒い波が襲ってきたというような被害状況は話せても、肉親を失った心の叫びというもの、は中々どこにも伝えにくいもの、は中々です。10年経過して、ようやく胸の内を短歌に託して表現するようになった私の知り合いもいます」という貴重なお話も聞かせてもらいました。あの震災を風化させてはいけなと、改めて感じました。

鳩山町に移り住んで...

福島から震災で鳩山町に避難し、そば屋を開業している渡部由美子さん(写真左)と息子さんの渡部恭平さん(写真右)、娘さんの塚越玲奈さん(写真中央)にお話を伺いました。



現

店主の渡部由美子さんの夫、博幸さんは福島県でそば屋を営んでいました。しかし開業して1年ほどで、東日本大震災が発生、原発事故から渡部さんご一家も避難せざるを得ない状況の中、茨城県の親戚の家に一時避難していましたが、息子さんの恭平さんが当時勤めていた会社でJAXAの避難所の情報を聞き、鳩山町に平成23年の4月末に避難してきました。

5年前に現在の「楓」がオープンしましたが、3か月後に博幸さんの病気が再発し亡くなってしまいました。お店をどうしようかという話になった時に、由美子さんがそば打ちを引き継ぐことに。1年間猛練習をし、店に出せるくらい腕前になった頃に店を再開しました。「娘と2人では店ができないので、息子さんを呼んでつゆを作ってもらうことにしました。結



▲「楓」特製の揚げ蕎麦がき。おろしポン酢でいただきます。

■手打ちそば 楓

- 営業時間 午前11時～午後2時30分(蕎麦がなくなり次第閉店)
- 定休日 火曜日(祝日は営業) 第3月曜日
- 住所 鳩山町石坂525-1
- 電話 049-236-3035